『北と南』
――『シャーリー』の再構築――

白井 義昭

シャーロット・ブロンテの『シャーリー』（*Shirley*, 1849）の 6 年後に出版されたエリザベス・ギャスケルの『北と南』（*North and South*, 1855）は、『シャーリー』同様、労働問題を扱っており、“industrial fiction” あるいは “Condition-of-England novel” とみなされ、『シャーリー』と関連づけて論じられることが少なくない（Bodenheimer 295; Lewis 243; Stevenson 10-16; Barbara Leah Harman 63-65）。しかし、両作品には労働問題以外にも、シンメトリカルな語りの構造や類似した固有名詞の使用など作品全体にわたり多くの対応関係が認められるのだが、これらの点について論じられることはあまりなかった。したがって本論ではこれらの対応関係を明らかにし、ギャスケルがそれらにどのような変更を加えて『シャーリー』を再構築し、彼女がレディ・ケイ・シャトルワースに伝えていたこの作品のプロット上の欠点（*Letters* 116）を克服し、彼女自身が望む作品に作り替えていったのかを論じることとしたい。

1

『シャーリー』の大きな特徴は、作品冒頭の描写が巻末において再現されるという点だ。つまり、この作品は 3 人の助祭の登場で始まり、彼ら聖職者に対する風刺が綴られ、その後にロバート・ムアの労働問題や彼とキャロライン・ヘルストンとの恋愛、それにロバートの弟ルイ・ムアとシャーリーとの恋愛を語るメーンプロットが挟まれ、最終章において再び 3 人の助祭が登場し、彼らのあまりに俗物的な現状が語られるという、シンメトリカルな語りの構造を持っているのだ。しかも物語の両端で彼らの過去と現在が対照的に描写され、その結果、巻末においてかなりの変質を経た彼らの実情が皮肉を込めて風刺される構造となっている。しかしこの構造が完全なシンメトリーになっているかというと必ずしもそうだとはいえない。この後でロバートとキャロラインならびにルイとシャーリー

の二組の結婚式が挙行されるという結婚のエピソードが蛇足的に付け加えられるからだ。

『シャーリー』に触発されたのか、ギャスケルはそこで認められたシンメトリカルな構造を『北と南』に取り入れている。この作品は結婚を間近に控えたマーガレット・ヘイルの従妹イーディスのロンドンにおける結婚の話題で物語が始まり、最後は同じくロンドンにおけるマーガレットの結婚の話題で完結する。この作品には『シャーリー』で見られた蛇足的なエピソードの付け足しはない。作品の巻頭と巻末は完全なシンメトリーを構成する。しかも会話文で始まり、会話文で終わるという、さらなる別種のシンメトリカルな構造を認めることもできる。

このようなシンメトリカルな構造は、『北と南』以前に出版された『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848) と『ルース』(*Ruth*, 1853) には認められないが、『北と南』の次作『シルヴィアの恋人たち』(*Sylvia's Lovers*, 1863) では、『シャーリー』の影響が及んでいるためであろうか、それが認められる。つまり、この作品は漁港モンクスヘイヴンのかつての様子の描写で始まり、最終章の第 14 章でこの漁港が再登場するのだ。しかも『シャーリー』で認められたと同じように、巻頭と巻末でこの地の対照的な現状が提示されるという手法も用いられている。ギャスケルの最後の作品『妻たちと娘たち』(*Wives and Daughters*, 1864-66) がシンメトリーを有しているか否かは、この作品が未完で終わっているために論じることはできない。

ギャスケルは『北と南』で『シャーリー』のシンメトリカルな構造を引き継ぐにあたり彼女なりの味付けをする。『シャーリー』の語り手は巻頭で若い助祭の様子を紹介するときにロマンスを期待してもらっては困る、冷静になってもらいたいと読者に警告を発して読者の期待を裏切り (7)、教訓を求める読者に手引きを与えるのを控えて物語を終えていたが (740-41)、『北と南』ではそうではない。娘の結婚を控えて華やかな雰囲気が漂うロンドンの叔母の屋敷で物語が始まり、巻末は同じその叔母の屋敷で今度はマーガレットがソーントンと結婚するだろうという明るい見通しが立って終わるようになっているのだ。ギャスケルは『シャーリー』の技法に一ひねりを施し、読者の期待に沿う彼女流のエンディングに再構築しているといえる。

さらに両作品には以下に述べるようなきわめて興味深いコントラストが認めら

れる。『シャーリー』の巻頭部分に登場するのが男性の助祭たちであるのに対して、『北と南』の巻頭部分に登場するのはマーガレット、叔母それに従妹イーディスの女性たちである。また『シャーリー』で助祭たちの脇役として登場するのが下宿の叔母さんのミセス・ゲイルと女性であるのに対して、『北と南』の脇役的な人物はイーディスの婚約者キャプテン・レノックスという男性である。つまり『シャーリー』と『北と南』の巻頭部分では対応関係にある主役と脇役の人物の性がいずれも反転しているのだ。

巻末部分でも同様な反転関係は維持されている。『シャーリー』の場合には助祭たち、それに妻を従わせているムア兄弟のその後の男性の日常生活が描写されているのに対して、『北と南』ではマーガレット、叔母それに従妹ら女性たちのロンドンでの生活が描写されているのだ。

2

『北と南』を読んで最初に得られる感情は、この作品には『シャーリー』やブロンテに関係する固有名詞が頻発するということである。ギャスケルが作中の固有名詞に何らかの意味を持たせていることはユーグロウが指摘しているところで、たとえば「灰色の女」(“The Grey Woman,” 1861）のヒロイン、アンナ・シェラーにかしずく召使は “aptly called Amante”（Uglow 165）であるし、ルースの別れた恋人 Donne は 17 世紀の形而上詩人ジョン・ダンと関わりがあると思われる（Uglow 332)。さらに面白いことにギャスケルは『ハウイッツ・ジャーナル』(*Howitt's Journal*）に Cotton Mather Mills というペンネームで寄稿していて、このペンネームについてユーグロウは “It suggests the setting—cotton mills—yet the central ‘Mather’, with its unconscious echo of ‘mother’, points to the buried central image of all three stories”（172）と、とても示唆に富むコメントを付けている。

それでは『北と南』ではどうなのか。マーガレットが父親と住んでいた故郷の村は Helstone である。これは『シャーリー』のヒロイン、キャロライン・ヘルストンから取ったと考えてよいであろう（Ingham 426-27)。さらに第 1 巻第 5 章には Heston（50）という地名が登場する。これは Helstone の作り替えであろうとインガムは推定する（429)。マーガレットの母親は北部の工業都市 Milton への移住を嫌がっていて、その母親をいかに説得するかに悩んでいた彼女の頭に浮

かんだのが、ミルトン近郊にヘストンという良い海水浴場があるということであった。ヘストンは故郷ヘルストンと縁の浅からぬ地名であるがゆえに、それをだしにして母親をミルトンへ連れて行こうという魂胆である。海水浴場行きの話を進めるための命名の仕方となっているのだ。さらにミルトンという都市名は、非国教徒詩人ジョン・ミルトンを想起させる（鈴木 354）。実はミルトンは『シャーリー』の第 2 巻第 7 章で話題にされていたのである。

それでは人名の場合はどうであろうか。ミルトンの紡績工場主の姓名は John Thornton で、彼の苗字 Thornton はブロンテと大いに関わりのある同名の土地から取られているように思われる。ではソーントンとはブロンテにとってどのような場所であったのか。1815 年 5 月ブロンテ姉妹の父親パトリックは、友人トマス・アトキンソンと互いの教区禄を交換し、妻と幼子二人を引き連れてブラッドフォード近郊のソーントンへ越し、1820 年までそこで過ごした。シャーロット、ブランウェル、エミリ、そしてアンが誕生したのは、ほかでもなくこの地であった。ここでの滞在期間中だけ、彼らは地域住民と親しく交流した。パトリックがいつも語っていたことには、ここで過ごした 5 年間が人生で最高の時間であった（Claire Harman 19）という。ソーントンという町はブロンテ家にとってきわめて深い意味を持つ場所だったわけであり、ブロンテを意識していたギャスケルがマーガレットの結婚相手にソーントンという名前を付けたのは至極当然と思われる。さらに想像を膨らませれば、『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）におけるジェインとロチェスターの恋愛の場であったソーンフィールドをこの名前は思い起こさせなくもない。そう考えるならばこれはマーガレットの恋人にまさにぴったりの名前ではないだろうか。

もちろんこうした現象とは無関係に付けられた名前もある。ギャスケルはジョンという名前が好きだったらしく『北と南』以外の作品においても多用しているのだが、[1] それでもソーントンのジョンという名前は『ジェイン・エア』のジョン・リード、セント・ジョン・リヴァーズ、それにジョンの女性形であるジェインを想起させる。またイーディスの夫は Captain Lennox と、ファーストネームではなく、肩書で呼ばれていて、ここにシャーリーが男勝りゆえに Captain Keeldar（*Shirley* 227）と呼ばれていたことが反映されているとみなすことができるだろう。

ブロンテとの関連性が推測できる人名はさらに認められる。たとえば紡績熟練

工ニコラス・ヒギンズの娘 Bessy (“Betsy” とも綴られる) である。『ジェイン・エア』では “Bessie” となっていて、最後の綴りの部分が異なるものの、ギャスケルのベッシーはジェインの世話をかいがいしくしてくれたこの女中から取られたと推察できる。

女中との関連でさらに付け加えるならば、ミセス・ソーントンがマーガレット家に紹介した Martha という女性がいる。同名の女中はすでにブロンテの『ヴィレット』(*Villette*, 1853) にもミセス・ブレトンの女中として登場している。女中ではないが、さらにさかのぼるならば『教授』(*The Professor*, 1857) [2] にはハンズデンが求愛していた Sarah-Martha という女性もいる (*The Professor* 28)。

マーガレットの父親のオックスフォード大学時代の恩師で彼女の後見人となった人物は、人類の父祖を暗示する Adam をファーストネームに持ち、ブロンテ姉妹と切っても切れない苗字 Bell を持つ。周知のようにブロンテ姉妹は 1846 年に『カラ、エリス、アクトン・ベル詩集』(*Poems by Currer, Ellis and Acton Bell*, 1846) という詩集を自費出版した。ジェランは Bell がパトリック・ブロンテの助祭アーサー・ベル・ニコルズに由来するのではないかと述べている (185)。ニコルズは『シャーリー』ではマッカーシーとして描かれ (786)、最終章でマッカーシーは “he proved himself as decent, decorous, and conscientious, … he was sane and rational, diligent and charitable” (724-25) と描かれている。『北と南』のベルはマッカーシー (＝ニコルズ) 同様、大変真面目で実直な人物で、マーガレットの後見人として彼女の世話をそれこそ親身になってしてくれ、最終的には莫大な遺産を譲ってくれた恩人である。そのような人物にはやはりベルという名前が相応しい。ベッシーの父親の名前 Nicholas が Nicholls のつづり違いであり、もともとは同語であるというのも興味深い。

さらにヘルストン時代のマーガレットには作者と同名の Charlotte という召使いもいた。『北と南』とブロンテの縁の深さを改めて感じざるを得ない。シャーロットといえば、彼女の母親と長姉も Maria という名前であったことを思えば、マーガレットの母親が同名であるのは偶然の一致にしては出来すぎであろう。やはりそこにはブロンテに対するギャスケルの思いがあったはずだ。

以上からギャスケルは『シャーリー』を始めとして、『ジェイン・エア』それにブロンテに関係するものから着想を得て『北と南』の人名・地名を命名してい

ることが知られたであろう。ギャスケルは登場人物あるいは土地の名称をブロンテから（場合によっては、人名を地名に、反対に地名を人名に反転させながら）借用したうえで、『シャーリー』を彼女自身の物語に書き換えて再構築しているのだ。

3

ここでは地名ミルトンが『北と南』でいかに『シャーリー』の再構築に与っているかを見ていきたい。『シャーリー』不評の原因であるプロット展開の不安定さを克服するためにギャスケルは『北と南』のヒロインをマーガレット一人に絞ることとした。彼女を巡る男性としては弁護士のヘンリー・レノックスと紡績工場主のソーントンの二人しか置かず、しかもヘンリーは第 1 巻第 3 章でマーガレットに求婚したものの、彼女に断られるように仕立て、彼を彼女の恋の対象から外した。このようにしてマーガレットとソーントンの恋の行方にだけ読者の目が注がれることとなった。しかもギャスケルはこの恋愛のプロットと密接に関連づけながら労働問題のプロットを展開していった。ソーントンとヒギンズの労働問題はマーガレットの仲介によって改善され、その改善が進むにつれて彼女とソーントンの恋愛が進展するようになっている。このようにして『シャーリー』では実現できなかったすっきりとしたプロット展開が可能となった。

マーガレットの恋路はミルトンという土地と大いに関わっているように思える。前述したようにこの地名は『シャーリー』で言及されていた詩人ミルトンから取られたと推察できる。『シャーリー』第 2 巻第 7 章ではミルトンを引き合いに出し、この世は男性ではなく女性が創りだしたもの、というフェミニズム論が展開される。そのところを見てみよう。[3] ある夕方のこと、シャーリーは教会には入ろうとせず、キャロラインとともに教会の外にいて彼女の自然観を述べる。それに対して、それはミルトンの見た夕べではないわねとキャロラインが念を押すと（359）、シャーリーはそのとおりと答え、ミルトンは天国も地獄もサタンも、サタンの娘である罪も、天使たちも見たが、ミルトンが見たのは「人類最初の女性」ではなく、ミセス・ジルのような料理人の女性だったと述べる（359）。しかし、本来女性とは台所にいて料理を作るだけの存在ではないはずだ、とシャーリーは主張する。ミルトンは男性に奉仕する料理人のような存在が女性だと考えている

が、実は “The first woman was heaven-born”（360）と語ってシャーリーは女性の優位性を熱く説く。彼女によればミルトンは父権制的な考えの持ち主ということになる。

それではこのように解釈された詩人の名前ミルトンを地名に用いて、ギャスケルは『シャーリー』をどのように再構築して『北と南』に仕上げたのだろうか。この物語の大半はミルトンを舞台にして進められる。マーガレットの父親リチャードは英国国教会の教義に同意できないとして教区牧師を務めていたヘルストンを発ち、ミルトンへ転居してきた。夫の行動に妻は不満を覚えるものの、リチャードは妻の意向を完全に無視し自分の意思を通す。妻と娘は彼に従うだけである。彼はソーントンの家庭教師として生活を維持する。[4]

ミルトンにはもう一人父権制的な行動をする男性がいる。ソーントンである。彼は労働者に精勤を求め、彼らの貧困は彼らの努力不足によると考えるきわめて専制的な人物である。このようにミルトンという町には母権制とは相入れない思想を持つ強烈な個性の持主が君臨し、そこには強い父権制的な気配が漂っているのだ。この意味でこの土地が父権制的な思想の持ち主である詩人ミルトンの名を付けられているのは当然といえば当然である。

しかしながらそこの状況は徐々に変質していく。第 1 巻第 22 章はこの作品における男女の力関係を考えるうえで重要な章である。マーガレットは工場に押し寄せた労働者群集の面前に立ち、ソーントンを彼らの投石から守ろうとし、群衆の投石を受けて額に負傷する。その時までソーントンは逞しい工場主として君臨してきたのだが、この投石事件を機に、彼の人生はこれまでの工場主としての「男性」中心のものから「女性」の「仲介」を必要とするものに変わる（Stevenson 13）。

この事件以降ミルトンではマーガレットの存在感が増していく。1849 年 8 月に母親が死亡すると、[5] 父親と兄は悲しみにくれるだけで何もできず、葬儀の準備を含むすべてを彼女に任せる（232）。ここには己の信念に基づいて英国国教会から離脱したということから思い描かれたかつての強い父親像はもはや認められない。そもそもマーガレットの父親が男らしい強い男性であったのかというと、どうもそうではなく、実はきわめて女性的な容姿の持ち主（77）で、それに見合った心の持ち主だったようである。このことは息子が官憲の目を逃れるために妻の

葬儀前に列車に飛び乗り、ミルトンを去った後の彼の行動から読み解くことができるように思われる。息子のその後の消息を案じ、彼は不安感を募らせていく。安楽椅子に静かに座って日を過ごしていたそれまでの習慣は途絶え、部屋を徘徊したり、部屋を出ては何の目的もなく寝室のドアを開けたり閉めたりするようになる。マーガレットは父親を落ち着かせるべく、あたかも幼子をなだめるように大きな声で本を読んであげるのであった（249）。

威厳を失った父親はマーガレットにとり迷惑な存在でしかない。だからであろう、1850 年 4 月彼がベルの招待を受け、オックスフォードを訪問することになった時、この父親を駅で見送ったマーガレットは心の重荷が取れたような開放感に包まれる（313）。父親は彼女の保護者ではなく、むしろ彼女の世話を必要とする被保護者となっていたのだ。それゆえに父親の不在が彼女には大きな喜びとなった。しかも、あろうことか父親はベル家に滞在中に急死する。表現は適切でないが、彼女の行動を束縛していた男性の消失である。

ベルはマーガレットに彼女の父親の死亡を告げる手紙の中で、自分が死亡したときには彼女に彼の遺産を贈与することを約束してくれた（331）。それから間もなく彼は卒中発作に襲われ、命を落とす。彼の死はマーガレットにとって大きな悲しみであった。しかしこのことが女性としての彼女の生き方に否定的に作用したとは言い難い。第 2 巻第 24 章はマーガレットに同行してオックスフォードへ行った夫に “Is not Margaret the heiress?”（374）と呟くイーディスの声から始まり、これ以降『北と南』は、遺産を手にして資産家となったマーガレットが如何にミルトンという男性中心であった共同体を女性中心の共同体に変貌させていったかの物語となる。イーディスによればマーガレットの遺産は動産 2 千ポンド、不動産 4 万ポンド（374）である。マーガレットは叔母の家に同居する中で、ついに他人に頼り切らない生き方をしようと努める（377）。ベルの屋敷を遺贈された彼女は、ソーントンを借家人とする大家（382）となるのだ。

これに対応する『シャーリー』ではどうであったのか。シャーリーは、父権制的な思考の持ち主である詩人ミルトンを批判し、母権制的な主張をするものの、マーガレットとは異なりロバートを守るといった勇ましいフェミニスト的な行動をとらず、かつての家庭教師であったルイを “My master”（709）（「教師」と「主人」の意味を持つ）として仰ぐ、男性に従順な女性となり、これまでの女性のよ

うに彼の妻の座に安住する。

他方ロバートは、労働者の暴力を受け、瀕死の重傷を負い、キャロラインの手厚い看護を受けるなかで人間性を回復するものの、物語の終盤に来て、彼を悩ましていた枢密院令が撤回され、破産を逃れて実業家として再出発できる見通しが立つと、男としてのプライドを再び獲得してついにキャロラインに結婚を申し込むこととなる。きわめて常套的な表現であるが、そのときのプロポーズの言葉とキャロラインの返答はまさに二人の主従関係を表しているように思われる。

> His hand was in Caroline's still: a gentle pressure answered him.
> "Is Caroline mine?"
> "Caroline is yours." (733)

キャロラインはロバートの所有物（"mine"）となるのである。その場で彼は結婚後の未来像を彼女に語る。弟と彼とでブライアフィールドの教区を分割所有し、フィールドヘッドの主人となった弟は地区の治安判事になり、ロバートは茂っている雑木林を伐採し、そこに道路を敷設し、家を建築し、工場を拡張し、多くの労働者に仕事を与え、さらにはキャロラインのために日曜学校を造るつもりだという。まさに一人の男による "Extravagant day-dreams"（738）である。このように『シャーリー』は母権制を主張していたかに見えながら、最終的には二人のヒロインが夫に従うという、従来の結婚観を引き継いで物語の終わりを迎えようとするのであり、ここには詩人ミルトンが支持する父権制への揺り戻しがある。

マーガレットが大家となった後の『北と南』のミルトンという空間は、ますますマーガレットが上位に立つ女権制的空間へと転じる。労働者を "hands"（113）と呼んで彼らを手足のように扱っていたソーントンの事業経営は悪化の一途をたどり、ついに彼はそれまで心血を注いできた事業を閉鎖する羽目に陥り、ハンパー氏の息子が経営する会社の共同経営者になったらという依頼を拒み、鬱々とした日々を過ごすこととなる。そうした彼を救うべくマーガレットは彼に 18,057 ポンドを貸すという驚くべき提案をする（394）。ソーントンはこの提案にマーガレットの彼への愛を確認し、彼女へプロポーズし、彼女は彼のプロポーズを受ける。彼は彼女への強い愛の証として、彼女の故郷ヘルストンで摘んできたバラを

彼女に差し出す。マーガレットはそのバラを受け取るのだが、そのときの "'You must give them to me,' she said, trying to take them out of his hand with gentle violence" (395) の最後の 2 語に注目したい。彼女は女性らしく "gentle" にではあるけれども、しかし "violence" を持って彼のバラを受け取る。この表現からは男性に従順に従うという女性像を思い描くことはかなり難しい。

『北と南』は母権制的色彩を濃くした物語へと変質したのだ。このように変質した物語世界では男性は重きをなさない。この作品の最後はまさしくそのことを雄弁に物語っている。マーガレットとソーントンの二人の運命を左右するのはショウ叔母とミセス・ソーントンの女性二人の反応だ。しかもこの二人の反応の中で重い比重を占めるのは "That man!" (396) ではなく、"That woman!" (396) の方だ。従妹へ呼びかけるマーガレットの声で始まったこの作品世界は、マーガレットによる女性への言及で終わる。

4

これまで『北と南』を『シャーリー』と関連させながら論じてきた。シンメトリカルな語りの構造、類似した固有名詞の使用、恋愛と労働問題を主軸とした二つのプロット展開など両作品には多くの対応関係が認められた。しかし、巻頭部分と巻末部分における中心的な登場人物が『シャーリー』では男性であるのに対して『北と南』では女性であり、中間部分では主要人物が『シャーリー』では男性から女性へ、そして最後に再び男性へとゆらぐのに対して、『北と南』では男性から女性へ移るのみという相違がみられた。プロットの面では『シャーリー』では聖職者への風刺——労働問題——恋愛問題——そして再び聖職者への風刺と移り変わり、それにあわせて登場人物たちの行動が父権制——女権制——父権制と揺れ動くのに対して、『北と南』では恋愛問題と労働問題の二つのプロットが精妙に関連しながら発展し、それにあわせて登場人物たちの行動は父権制的なものから女権制的なものへと一本の道を着実に歩んできた。

こうしたことから両作品の関係は、写真に例えるならば、一部多少の例外はあるが、ネガ（陰画）とポジ（陽画）の関係にあるといえるのではないだろうか。なぜならば『シャーリー』で描かれる物語世界の色彩が『北と南』では反転するからである。Shirley という名前が女性名ではなく本来は男性名（*Shirley* 221-22）

であり、かつギャスケルが当初は『北と南』のタイトルを女性名の *Margaret Hale* としていた（Easson xii）ことを思いだすならば、タイトル同士も男性から女性に反転していることになる。形態は同じだが、色彩に相当する物語風景の白黒が反転しているのである。

面白いことに *OED* によれば、写真術におけるこのような意味でネガ・ポジが英国で使われはじめたのは『北と南』の最初のエピソードが『家庭の言葉』（*Household Words*）で発表される一年前であった。[6] ということは『北と南』執筆中にギャスケルがそのような写真術の技法を知っていた可能性があるということであり、その技法を文学に転用したと推察できなくもない。

ギャスケルは自分が思い描くのとは真逆な像が『シャーリー』に描かれていると感じ、それを反転させて彼女がまさしく思い描いていた像を完成させた。ネガとして映し出されていた物語世界をポジに現像することによって『シャーリー』を再構築したのである。マクラムは 2015 年に『ガーディアン』紙（*The Guardian*）で英国小説 100 選を発表した。残念ながら『北と南』は選に漏れた。熟考の末に不採用としたのはギャスケルの魅力が理解できなかったからだとマクラムは告白している（McCrum）。しかし、もし彼がこの作品がブロンテの『シャーリー』を強く意識して執筆されたこと、そして『シャーリー』とはネガ・ポジの関係にあったことを認識していたならば、違った選択をしたかも知れないと残念に思えて仕方がない。

注

本稿は日本ギャスケル協会第 30 回例会（2018 年 6 月 2 日、於岡山国際交流センター）での講演に加筆修正を施したものである。

1　『北と南』以前の『メアリ・バートン』ではメアリの父親、それに彼女の恋人の父親で工場主にそれぞれ John という名を付け、またメアリの幼馴染ジェムの母親には Jane という名を付けている。『従姉フィリス』（*Cousin Phillis*, 1863-64）の語り手の父親も John である。『妻たちと娘たち』ではヒロインの通い家庭教師（daily governess）が Miss Eyre と名付けられているのも興味深い。

2　この作品は『ジェイン・エア』出版以前に完成していた。

3　この辺の議論は Day に負う。また白井 14-15 と重なるところがある。

4『シャーリー』ではルイがかつてシャーリーの家庭教師であったという設定になっており、そのことがリチャードとソーントンの関係に反映されているとみなすことは可能であろう。

5　物語の時間構成については Ohno と大野を参照。

6　*OED*:

negative, *n*.

8. a. *Photogr*. A print made on specially prepared glass or other transparent substance by the direct action of light, in which the lights and shadows of nature are reversed, and from which positive prints are made.

1853 W. H. T. *Photogr. Manip*. (ed. 2) 14 Fifth operation. Fixing the negative.

positive, *n*.

5. *Photogr*. A picture in which the lights and shadows are the same as in nature: opposed to NEGATIVE *n*. 8.

1853 *Fam. Herald* 3 Dec. 510/2 To obtain from those pictures good prints or positives.

引用文献

Allott, Miriam, editor. *The Brontës: The Critical Heritage*. Routledge and Kegan Paul, 1974.

Bodenheimer, Rosemarie. "*North and South*: A Permanent State of Change." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 34, no. 3, December 1979, pp. 281-301.

Brontë, Charlotte. *The Professor*. 1857. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford Clarendon P, 1987.

——. *Shirley*. 1849. Edited by Herbert Rosengarten and Margaret Smith, Oxford Clarendon P, 1979.

Day, Paula. "Nature and Gender in Victorian Women's Writing: Emily Brontë, Charlotte Brontë, Elizabeth Barrett Browning, Christina Rossetti." Diss. U of Leicester, 1990.

Easson, Angus. Introduction. *North and South*, by Elizabeth Gaskell, Oxford UP, 1982, pp. ix-xviii.

Gaskell, Elizabeth. *The Letters of Mrs Gaskell*. Edited by J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, Mandolin-Manchester UP, 1997.

——. *North and South*. 1854-55. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 7. Edited by Elisabeth Jay, Pickering & Chatto, 2005.

——. *Wives and Daughter*. 1864-66. *The Works of Elizabeth Gaskell*, vol. 10. Edited by Josie Billington, Pickering & Chatto, 2006.

Gérin, Winifred. *Emily Brontë: A Biography*. Oxford UP, 1971.

Harman, Barbara Leah. *The Feminine Political Novel in Victorian England*. UP of Virginia, 1998.

Harman, Claire. *Charlotte Brontë: A Life*. Viking, 2015.

Ingham, Patricia. Notes. *North and South*, by Elizabeth Gaskell, Penguin Books, 2000, pp. 426-49.

Lewis, Michael D. "Democratic Networks and the Industrial Novel." *Victorian Studies,* vol. 55, no. 2, Winter 2013, pp. 243-52.

McCrum, Robert. "The 100 best novels: from Bunyan's pilgrim to Carey's Ned Kelly." *The Guardian*, 16 Aug. 2015, www.theguardian.com/books/2015/aug/16/100-best-novels-bunyan-to-carey-robert-mccrum.

Oxford English Dictionary. 2nd edition. CD-ROM. Oxford UP, 2009.

Ohno, Tatsuhiro. "The Chronology of *North and South." Kumamoto Journal of Culture and Humanities: Studies in Literature and Language*, vol. 87, 2005, pp. 21-31.

Stevenson, Catherine Barnes. "Romance and the Self-Made Man: Gaskell Rewrites Brontë." *Victorian Newsletter*, vol. 91, Spring 1997, pp. 10-16.

Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. Faber and Faber, 1993.

大野龍浩、「『北と南』」、『ギャスケルの文学――ヴィクトリア朝社会を多面的に照射する』松岡光治編、英宝社、2001 年、112-39 頁。

白井義昭、「シャーロット・ブロンテの風景――最後の一筆」、『ブロンテ・スタディーズ』第 6 巻第 1 号、2015 年、1-30 頁。

鈴木美津子、「『北と南』とロマン主義時代の歴史小説」、『エリザベス・ギャスケルとイギリス文学の伝統』、日本ギャスケル協会編、大阪教育図書、2010 年、347-57 頁。

（日本ブロンテ協会前会長、横浜市立大学名誉教授）

Abstract

North and South: *Shirley* Reconstructed

Yoshiaki SHIRAI

Charlotte Brontë's *Shirley* and Elizabeth Gaskell's *North and South* belong to the genre of "industrial fiction" or "Condition-of-England novel" and have been discussed mainly from the point of labor and capital. It has, however, scarcely been noticed that they share other characteristics: a symmetrical narrative structure and the use of similar proper names. Gaskell adds a new twist to them in *North and South* in order to reconstruct *Shirley*, which has been held in disrepute for lacking a consistent plot sequence.

Gaskell reverses the gender of the main characters from male to female and converts Brontë's unstable narrative structure, which sways between patriarchy and matriarchy, into a matriarchal one. What surprises us more, moreover, is Gaskell's exquisite use of proper names in *North and South*. Besides using proper names connected with the Brontë family in her novel, she borrows some place names from *Shirley* and reverses them into people's names and vice versa. The name of Milton is not an exception. He is alluded to as a patriarchal poet in *Shirley*. Gaskell converts his name to that of heroine's hometown. The town Milton is stripped off of patriarchal nature attached to Milton the poet, and matriarchy comes to be dominant there. Furthermore, the titles of the two novels are also subject to this reversal mechanism. Considering that "Shirley" is in origin a male name and that the original title of *North and South* was *Margaret Hale*, it is clear where Gaskell's hidden intent lies.

Gaskell rectifies the defects of *Shirley* by reversing most of its aspects into contrary ones in *North and South*, and reconstructs it into a novel of matriarchy.